HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	異文化交流プログラム「ゼンゼミ」実施報告
Author(s)	奇, 春花
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 16, 146-156
Issue Date	2012-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52703
Type	bulletin (other)
File Information	JISC16_008.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第16号　(2012) [実践報告]

異文化交流プログラム「ゼンゼミ」実施報告

奇　　春　花

要　旨

本稿は、北海道大学国際本部が2012年５月と12月に実施した「ゼンゼミ」について振り返り、その活動を報告するものである。「ゼンゼミ」(英語名：Zen Seminar) は、留学生と日本人学生が共に寺で１泊２日を過ごしながら、グループワークを行い、座禅、日本文化などを体験する異文化交流プログラムである。留学生の数が増加している一方、日本人学生の海外留学への意欲は低下している背景下で、本プログラムは留学生により充実した支援を提供すること、日本人学生の海外若しくは異文化への興味を向上させること、ゼンゼミ参加者全員の異文化コミュニケーション能力を高めることを目指している。また、ゼンゼミは参加者たちが異文化理解から自文化理解へ、他者理解から自己理解へ進めるように様々な工夫をしている。本稿が示すゼンゼミの実践は、留学生と日本人学生を支援する機関、異文化交流を図っている組織等に一定の示唆を提供することができると考えられる。

〔キーワード〕異文化コミュニケーション、異文化理解、留学生支援、日本人学生と留学生の交流

1.　はじめに

ゼンゼミは北海道大学国際本部が2012年の５月に発足させた異文化交流プログラムで、第１回目は５月に日本語によって実施され、第２回目は12月に英語によって実施された。

留学生と日本人学生が共に寺で１泊２日を過ごし、異文化理解を深める為のグループワークや、座禅と日本文化体験などを行う。このプログラムは最終的に、異文化の理解から自文化の理解へ、さらに他者理解から自己理解へたどり着くことを図っている。また、日本文化の体験や、日本人学生との交流を望んでいる留学生のニーズ、留学生との交流を望んでいるにも関わらずなかなか一歩が踏み出せない日本人学生のニーズ、それぞれに

応えて2012年の１月から企画され始めた。このプログラムの特徴としては、寺という場所で禅について学ぶこと、留学生と日本人学生が共に日本文化を体験すること、異文化コミュニケーションを促進するグループ・ワークを行うことなどがあげられる。

プログラムの名称を「禅ゼミ」ではなく、「ゼンゼミ」にしたのは、「ゼン」の中には「禅」の意味のみではなく、北海道大学の理念の一つの全人教育の「全」；共に前に進むという意味での「前」など、いろいろな「ゼン」が包括されているからである。

2. 参加者について

参加対象者は北海道大学の留学生と日本人学生であるが、外国人研究者も希望すれば参加でき、宿泊施設のキャパシティーなどを考慮した上で参加人数を25人～30人に設定した。参加者のうち約半数を日本人学生に想定し、留学生参加者においてもなるべく国籍ないし文化の多様性を考慮した。５月と12月の参加者の詳細は以下の通りである。

第１回ゼンゼミは2012年５月26（土）と27日（日）に実施され、応募者は41人（うち留学生30人、日本人学生11人）であり、特に中国人留学生の応募者が多かった。参加者の多様性を考慮した上で抽選を行い、その結果26人（留学生17人、日本人学生９人）の参加者が決定した。参加者の属性別詳細は以下の表の通りである。

表１　第１回ゼンゼミ参加者国別人数

日本	中国	ドイツ	フィンランド	ロシア
９人	８人	２人	２人	１人
韓国	メキシコ	ミャンマー	マダガスカル	計９か国
１人	１人	１人	１人	計　26人

表２　第１回ゼンゼミ参加者身分別人数

大学院生（研究生含む）	学部生	非正規生（日研生[1]、HUSTEP[2]留学生等）	研究者
10人	９人	６人	１人

参加者の身分は様々で特に偏りはみられなかった。また、参加者の中からリーダーを決めたりはしなかったが、自然と２人の日本人学生が参加者

をまとめていくことに貢献した。

第２回ゼンゼミは2012年12月１（土）と２日（日）に実施され、応募者数は計49人（うち留学生31人、日本人学生18人）で、第１回ゼンゼミの応募者数と比較すると、留学生の応募者数には大きな変化がみられなかったが、日本人学生の数が大幅に増えたのが印象的である。前回同様多様性などを考慮した上で抽選を行い、27人（留学生14人、日本人学生13人）の参加者が決定したが、２人が当日辞退して、計25人（留学生13人、日本人学生12人）がゼンゼミに参加することになった。第２回ゼンゼミは英語で行われた為、HUSTEP留学生からの参加者が多数であった。日本人学生の参加者は全員学部生であった。

表３　第２回ゼンゼミ参加者国別人数

日本	韓国	中国	タイ	シンガポール	アメリカ
１２人	２人	２人	２人	１人	１人
ロシア	ウクライナ	クロアチア	フランス	インドネシア	計11か国
１人	１人	１人	１人	１人	計　25人

表４　第２回ゼンゼミ参加者身分別人数

大学院生（研究生含む）	学部生	非正規生（日研生、HUSTEP留学生等）	研究者
１人	12人	11人	１人

日本語で実施した第１回ゼンゼミでは、２人の日本人学生が積極的にリーダーシップをとったが、第２回ゼンゼミは英語で実施したからか、英語が得意な２人の留学生が自然にリーダーになって参加者たちをまとめる役割を果たした。

3.　プログラム実施者

ゼンゼミは、北海道大学国際本部に所属する二人の国際オフィサー[3)]を中心に企画・実施された。それぞれ教育臨床心理学とカウンセリングを専攻し、日頃の業務においても頻繁に留学生および日本人学生と接触している。グループワークは二人の国際オフィサーが進行したが、座禅、茶道、ドラムサークルなどは、それぞれ地域の方々の協力下で行われた。

4.　プログラムの実施

4.1　プログラムの内容

表5　ゼンゼミスケージュル

第1回（5月26日＆27日）		第2回（12月1日＆2日）
札幌～滝川の往復交通手段：北海道大学公用バス		
1　日　目		1　日　目
午前	●「道の駅たきかわ」で菜の花畑見学＆地域の歴史を学ぶ	●ドラムサークル＆笑いヨガ
午後	●グループ・ワーク1. Getting to know each other ●グループ・ワーク2. Bafa Bafa ● 座禅	●グループ・ワーク1. Getting to know each other ●グループ・ワーク2. Bafa Bafa ●座禅
2　日　目		2　日　目
午前	●ボランティア活動 「菜の花を植えましょう！」 ●グループ・ワーク3. 十人十色 ●茶道	●朝のお勤め ●グループワーク3. 十人十色
午後	●グループ・ワーク4. 「世界で最も異文化を排除する村を作りましょう！」 ●グループ・ワーク5. 「世界で最も異文化を排除する村を変えましょう！」 ●振り返り	●茶道 ●座禅 ●振り返り

第1回目ゼンゼミは日本語で実施し、第2回目は英語で実施された。スケージュルは表5で示した通りであるが、第1回と第2回の内容は一部異なっている。今後も年2回、日本語と英語を交互に実施する予定で、プログラムの内容を益々充実させていきたい。

(1)　ゼンゼミ1日目

1日目の午前中は、2回とも地域との連携を重視した。第1回目（5月）は滝川の春の風物詩、菜の花を満喫しながら、江部乙丘陵地のファンクラ

写真１．ドラムサークルの様子
（第２回ゼンゼミ）

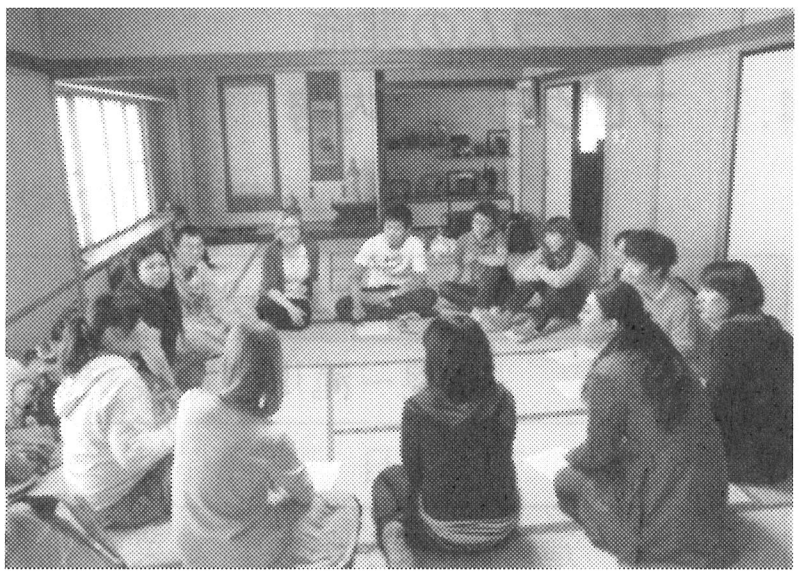

写真２．「Bafa Bafa」の様子
（第１回ゼンゼミ）

ブの協力で地域の歴史について学んだ。第２回目（12月）は、「ドラムサークル北海道」の協力で、室内でドラムサークルと笑いヨガを実施した。ドラムサークルは、参加者が輪になって色々な国の打楽器を用いる即興演奏である。ドラムサークルも、笑いの体操とヨガの呼吸を組み合わせた笑いヨガも、言葉の力に頼らず、参加者の緊張感を緩和し、チームビルディングをするのに有効であった。

１日目の午後は、主に参加者同士の自己開示と他者理解を促進するグループ・ワークを行って、参加者同士の信頼関係づくりに力をいれた。ある程度親しくなってからは、ロールプレイやディスカッション等の要素が含まれているグループ・ワーク２「Bafa Bafa」を行い、異文化理解の促進を図った。その後は寺の住職から座禅に関する説明を受け、座禅堂で座禅を行った。座禅の時は「無我」の境地を求められるが、座禅前のグループ・ワークで「他者」を経験し、座禅で「無我」を経験し、「他者」と「無我」から最終的には「自我」を顧み、「自分探し」の「旅」を経験することを念においた。

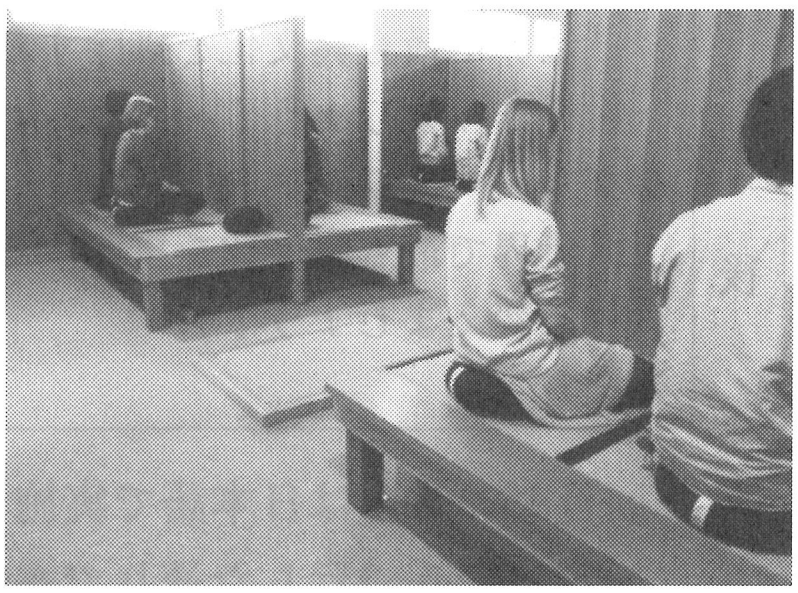

写真３．座禅の様子
（第１回ゼンゼミ）

(2)　ゼンゼミ2日目

第１回目（５月）は、朝早く起きて寺の周辺に菜の花を植えるボランティア活動を行った。ボランティア形式なので全員参加は求めなかったが、体調不良の１人以外は全員参加した。第２回目（12月）の朝は、寺の朝の勤

写真４．ボランティア活動の様子
（第１回ゼンゼミ）

写真５．「十人十色」の様子
（第１回ゼンゼミ）

めに全員参加し、住職のお経を唱える声とともに焼香を体験した。その後、いくつかのグループに分かれて、グループ競争の形でグループ・ワークを行った。お互いにすっかり馴染んできた参加者に、色々な国の人と協力し合って何かを成し遂げる経験をさせることが二日目の狙いである。グループ競争とディスカッションを組みあわせた「十人十色」では、他人の意見と習慣を尊重する大事さが楽しく学べる。そして、「世界で最も異文化を排除する村を作りましょう！」はディスカッションを通して一度差別に満ちた仮想社会をグループごとで作り、それについてプレゼンテーションしてから、「世界で最も異文化を排除する村を変えましょう！」で、その仮想社会を如何に改善していけばいいかについて再びディスカーションおよびプレゼンテーションを行い、最後には最も良い発想のグループを投票で選ぶ。第２回目（12月）のゼンゼミでは座禅の時間を一回増やした為、「世界で最も異文化を排除する村を作りましょう！」と「世界で最も異文化を排除する村を変えましょう！」を実施しなかったが、次回からは時間を調整して、実施する予定である。

２日目の茶道体験は日本人学生と留学生が共に行うということに意義があった。特に日本人学生にはインパクトが大きかったと思われる。「自分が思っていた以上に、日本文化に対して無関心だった」とアンケートの自由回答欄に書いた日本人学生もいる。自分の文化を外国人と共に経験するということは、自文化に対し

写真６．茶道の様子
（第２回ゼンゼミ）

て改めて考えるきっかけを提供したと考えられる。

(3)　寺生活

２日間の寺生活の中で、皿洗い、布団敷き、掃除はすべて参加者自ら行った。日本人にとってはごく普通のことであるが､布団を敷くことや､日本式の掃除の仕方などは留学生にとっては新鮮なことであった。面白がったり、驚いたりする留学生たちの様々な反応はまた日本人学生にとっては非常に新鮮であった。自分にとっては当たり前なことが、誰かにとっては当たり前ではないことを、身をもって体験したのではないだろうか。

写真６．皿洗いの様子
（第2回ゼンゼミ）

4.2　参加者アンケート（一部抜粋）

(1)　参加理由について

第１回ゼンゼミの参加者の参加理由について、「プログラムの内容に魅力を感じたから」を選んだ人が最も多く、参加者の約半数を占めた。その次には､「留学生・日本人学生と交流したいから」を選んだ人が多かった。

第２回ゼンゼミの参加者の参加理由は、第１回目の結果とは若干異なって、「留学生・日本人学生と交流したい」という目的で参加した人が最も多かった。そして､「異文化体験をしたい」という理由がその次に多かった。

第１回目は日本語で、第２回目は英語で質問用紙を作成し、表現においては多少異なるが、いずれにしても、留学生と日本人学生の間ではお互いに交流したいという願望が強く、ゼンゼミはその交流をサポートする有効な手段だと考えられる。

(2)　プログラム内容に対する評価

各活動に対する評価においては若干のばらつきはあるものの、全体的評価は非常に高い（図１、図２）。また、第２回の満足度を第１回と比較してみると、「非常に良かった」の比率が若干下がったことがわかる。その理由の一つとして、第２回ゼンゼミでは、日本人学生の半数以上が英語の

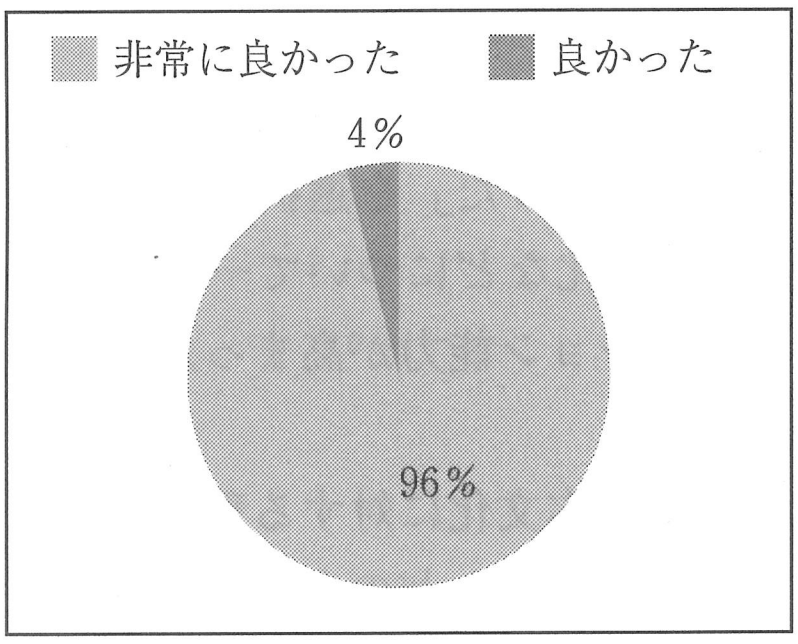

図１．ゼンゼミの満足度（第１回）

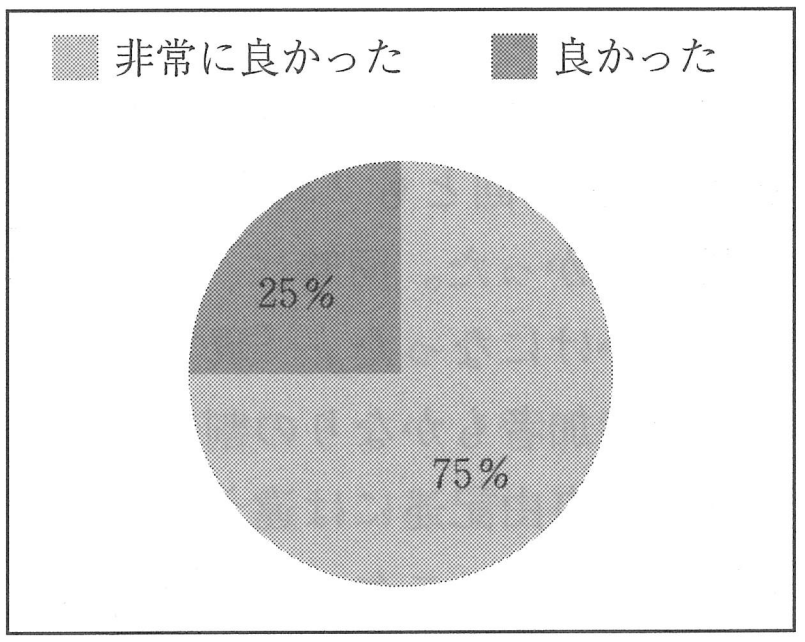

図２．ゼンゼミの満足度（第２回）

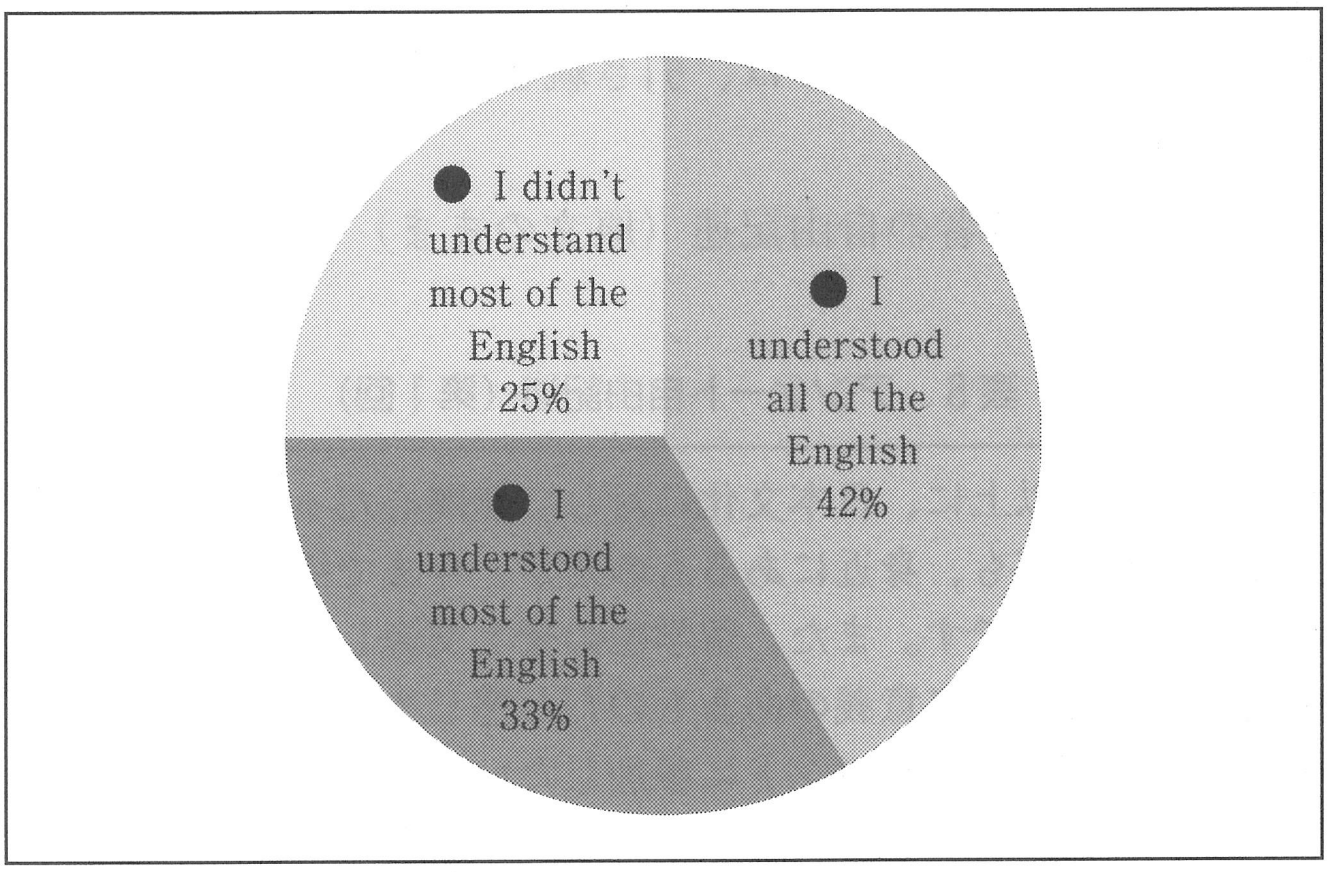

図３．英語の理解度について（第２回）

理解がうまくいかず、グループ活動でディスカッションなどを行った際、うまく英語が話せなかったことにストレスを感じたことが考えられる。しかし、満足度は下がったものの、そのストレスが自己理解と今後のモチベーションの向上と繋がる可能性は十分ある。

図３は、英語の理解度に関する回答であるが、「英語が殆ど理解できなかった」と回答した人は全員日本人学生である。２日間の合宿生活の中で、日本人学生が一生懸命英語で話そうとする姿が非常に印象に残った。日常会話においては、さほど支障が出ず、楽しくコミュニケーションができたと思われるが、グループワークの時は、殆どの日本人学生は積極的にディスカッションに参加できなかった。今後の英語によるゼンゼミにおいて、これは一つの課題としてあげられるだろう。

(3)　ゼンゼミの意義

ゼンゼミは参加者にどのような変化をもたらしたかという質問に（複数選択可）、２回とも「異文化に対する理解が深まった」を選択した参加者が最も多かった。同時に、「自分自身の国、文化などについて一度振り返るきっかけになった」、「異文化コミュニケーション能力が高まった」を選択した参加者もかなりの割合を占めた。

また、自由記述には違う国の文化もしくは日本文化に対する理解が深まり、対人コミュニケーション能力が前より向上したなどのようなコメントが多かった。

これは、前述したゼンゼミの目的がある程度達成したと思われるが、異文化理解の真髄に到達するまでは、引き続き異文化接触を体験していくことが不可欠であろう。

表６と表７は、回答者の自由記述（原文のまま）を一部抜粋したものである。

表６．アンケート自由記述（第１回）

自分が思っていた以上に、日本文化に対して無関心だったなと思いました。寺や禅も、茶も、身近にあるものだが、今まで深く学びたいと思うことはなかったです。また、留学生の皆と交流した経験も今後の大学生活において非常に意義のあるものだと感じました。今後は今よりも積極的にこういったイベントに参加したいと思います	日本人学生
楽しかった。グループワークのやり方はすごく面白い。色々な発想と違う文化に対する理解力や、人に対する交流は前よりうまくできたと思う。今後もこのようなイベントをやってほしい！ＺＥＮゼミ好きです。ＺＥＮゼミは胸いっぱいだ。	留学生

表７．アンケート自由記述（第２回）

I had a lot of fun over the weekend. It has been areally exciting trip for me. As I do not have many opportunities to mix around with the HUSTEP or Japanese students, I am really glad to embark on this seminar.	留学生
Danke! Nationality is not sounds improtant, each person have each personality.	日本人学生

5. おわりに

ゼンゼミは決して便利で快適なサービスを提供する「団体ツアー」という位置づけではない。ゼンゼミは、様々な国の人が共に１泊２日を過ごしながら、多少の不便があってもお互い尊重し合い、皿洗いや掃除などのような日常的なことから異文化交流スキルを高める為のグループワークまで、すべてを協働という形で行う「学びの時間」である。それぞれの習慣や文化の差はあるものの、その「差」を乗り越えて「共存」への理解を深め、自分を成長させていくことがゼンゼミの真髄ではないだろうか。

ゼンゼミが終わった後、参加者たちは自発的にFacebookでゼンゼミのグループを立ち上げ、引き続き交流を重ねていった。ゼンゼミは一つのきっかけを与え、そこから紡がれる新たな関係性と可能性は参加者それぞれの力に任せたい。

まだ様々な課題と向き合わなければならないゼンゼミであるが、より質の高いプログラムに仕上げる為に、試行錯誤を重ねながら、プログラムの内容をより充実させていきたい。

謝辞

滝川市興禅寺住職の芳村元悟様の多大なご協力に厚く御礼申し上げます。また、ゼンゼミ参加者の２日間の生活を全力にサポートしてくださった芳村敦子様、興禅寺茶道部の皆様、ドラムサークルの皆様、江部乙丘陵地のファンクラブの皆様にも心から感謝申し上げます。

注

1）日本語・日本文化研修留学生

2）英語による北海道大学短期留学プログラム（The Hokkaido University Short-Term Exchange Program）

3）北海道大学国際本部国際オフィサー募集要項によると、国際オフィサーは、「国際活動に関わる高い専門性を必要とし、職務によって、マネージャー、オフィサー、コーディネーター等のタイトルを付与される」職員である。

き　しゅんか（国際本部国際オフィサー・コーディネーター）

Journal of the International Student Center Hokkaido University No.16 (2012)

Report on cross-cultural program,'Zen Seminar'

Chunhwa KI

'Zen Seminar' is a cross-cultural program, conducted by the Office of International Affairs in May and December. In this program, international students and Japanese students from Hokkaido University spend two days together at a temple and hold various group activities, focusing on cross-cultural understanding. In addition, students also take part in Zen meditation and Japanese culture experiences. The objectives of Zen Seminar are to offer opportunities for communication between international students and Japanese students, improving cross-cultural communication ability, and finally broadening one's own understanding. This report hopes to make a contribution to cross-cultural education and also provide helpful ideas to organizations or people involved in planning events and/or programs concerning cross-cultural understanding.